



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	各附属学校・園の研究内容（研究年報）(fulltext)
Author(s)	
Citation	東京学芸大学附属学校研究紀要, 47: 193-204
Issue Date	2020-07
URL	http://hdl.handle.net/2309/159395
Publisher	東京学芸大学附属学校研究会
Rights	

【Ⅱ】 各附属学校・園の研究内容

学びを自分でデザインする子を育成する教育課程及び学習環境デザインの研究開発（第1年次）

—『本質』に迫る教科学習・教科カリキュラムの作成に焦点を当てて—

東京学芸大学附属世田谷小学校

1. 文部科学省研究開発研究1年次として

今年度より4年間文部科学省研究開発学校としての研究が始まった。1年次である今年度は、準備期間として、本研究を進めていくための「チーム学校」としての組織づくりと、「学びを自分でデザインする子」を育むための教科学習の最適化を研究の中核とし、次年度の教育課程を構想した。組織は、4つのWGで「教科学習のあり方」「自分で学びをデザインする子どもと学校を評価する枠組み」「新設時間である「ラボ」のあり方」「外部リソースの拡充とブランディットラーニングを視野に入れた学習環境デザイン」についての議論を進め個別の探究「じぶん de ラボ」の時間を試行し、次年度の教育課程についての検討をした。

2. 学びを自分でデザインする教科学習のあり方を考える

社会そのものの構造が変化し、求められる能力・人間が変化していこうとする中で学校というシステムは変化していない現状を踏まえ、これからの「学校とはどのようなものであるべきか」ということを考えることとなった。既存の「学校観」「学習観」にとらわれることなく、これからを生きる子ども達に必要な力を考え「学校とは何か」「学びとは何か」ということを改めて問い直す必要がある。その観点からそれぞれの教科において、代替不可能な学びを生む「教科の本質」とは何かということを考え、「その教科を学ぶ意味」からその存在意義まで考えることとした。また教科での学びを生かし、個々の問いや疑問を出発点とした探究活動をする「ラボ」の時間も生み出すことを視野に入れて、各教科のカリキュラムの編成を行った。そこで、時数、各教科の時数を現状の8割を目処に授業時数をラボに移行する計画を立案した。その際、各教科で「学びを自分でデザインする子どもを育てるために本当に必要なものは何か」という視点から改めて配列を見直し、単元構成の工夫やラボで必ず生かされる時間などを考慮し、教科のカリキュラムを最適化した。その結果、ラボの時間は第3学年で140時間、第4・5学年で210時間、第6学年で240時間生み出された。その際、目的を包含する第3学年以上の総合的な学習の時間、各70時間、計280時間は全て「じぶん de ラボ」・「みんな de ラボ」に変えた。それに追加して第3学年は国語から15時間、社会から10時間、算数から35時間、理科から10時間の計70時間、第4学年は国語から20時間、社会から25時間、算数から35時間、理科から25時間、体育から35時間の計140時間、第5学年は国語から60時間、社会から10時間、算数から35時間、理科から15時間、体育から20時間の計140時間、第6学年は国語から60時間、社会から5時間、算数から60時間、理科から15時間、体育から20時間の計160時間をラボの時間に充てることとした。今後は次年度に向けて、特別活動や、学校行事の扱いについても考えていく予定である。

3. 新設「じぶん de ラボ」・「みんな de ラボ」の時間のあり方

新設「じぶん de ラボ」と「みんな de ラボ」の時間では、自分の学びを見つめ、問いや疑問をもち、追究する課題を設定して計画・実施し、振り返り、次の探究へとつなげていくような学びを展開させたい。初めから上手にいくことを考えるのではなく、紆余曲折しながら、自分らしい学びをデザインできるように支えていきたい。このような学習は、現在の「総合的な学習の時間」のような週2時間程度の時間では足りないことが予想される。理想があっても、時間が十分に無ければ、時間に追われて「学びを自分でデザインする子」を育成することはできないと考える。3年生は現行の総合的な学習の時間の2倍、4年生以上は3倍程度の時間をかけて自分自身と向き合い、じっくり追究したり、多様な仲間と協働して学びをつくったりしていくことを実現したい。

（文責：永山 香織）

「こえる学び」を生む学習環境デザインの追究

附属小金井小学校

1. 研究テーマについて

今年度の研究は、3年計画の3年目として、2020年1月25日の研究発表会を目指して研究のまとめの年となるよう、外部講師を呼んでの講演会、校内研究会での研究授業及び協議会、各教科部の部内授業研等を通して研究を深めてきた。そして、無事、多くの参会者を集め研究発表会を終え、学校研究のテーマの『「こえる学び」を生む学習環境デザインの追究』に向けて、充実の3年間となる研究活動を行うことができた。

2. 本年度の研究と方法

本校では、上述のように、学校研究テーマを『「こえる学び」を生む学習環境デザインの追究』と設定し、1年目は、まずは子どもの実態を把握し、授業においてどのような姿が「こえる学び」なのかを検討した。その上で、「こえる学び」を生み出すために、授業における活動、空間、共同体といった学習環境をどのようにデザインしていくのかを考慮することにした。そして、2年目には、「没頭」「実践」「往還」を生む学習デザインを追究し、子供の学習活動の中に、「創造、改変、拡張、更新、変容、成長」の姿が見られるようにデザインを検討していくことにした。本年は、各教科部毎にテーマを再確認し、各教科授業における「こえる学び」とは何かを考え、それを生み出す学習環境デザインについて研究を深めた。そして、授業提案の機会がある教科は、研究授業を通して子どもの姿で提案・協議し研究を進めた。授業提案のない教科は、考え方を紙面提案し、全体で協議した。年度末には、全体研究理論及び各教科部の理論、実践報告をまとめ、研究紀要として編集した。

3. 本年度の研究の経過と概要

3. 1 校内授業研究会の経過

第1回研究授業協議会	4年生	理科	授業者：三井寿哉	講師：寺本貴啓先生（國學院大学准教授）
第2回研究授業協議会	5年生	図工	授業者：守屋 建	講師：有元典文先生（横浜国立大学教授）
第3回研究授業協議会	3年生	算数	授業者：田中英海	講師：渡辺貴裕先生（東京学芸大学教職大学院准教授）
第4回研究授業協議会	2年生	国語	授業者：成家雅史	講師：大澤千恵子先生（東京学芸大学准教授）
第5回研究授業協議会	3年生	社会	授業者：岸野存宏	講師：高木俊樹先生（東海大学講師）
第6回研究授業協議会	5年生	家庭	授業者：西岡里奈	講師：望月一枝先生（日本大学客員研究員）
第7回研究授業協議会	1年生	体育	授業者：濱田信哉	講師：鈴木聡先生（東京学芸大学教授）

3. 2 夏季研究会・各教科部内授業の概要

8月23日、26日、27日の3日間、夏季研究会を行い、外部講師として、大阪大学大学院教授松村真宏先生と津田塾大学教授高垣マユミ先生の2名にご講演いただいた。また、研究テーマと副題について協議を進めたり、研究著書や研究紀要、学習指導計画の編集について協議したりした。さらに、校内の研究会にて授業研究を行わなかった教員全員、部内授業として授業を公開し今年度の研究を深めた。

4. 本年度の研究成果と課題

「こえる学び」を生むために、「学習環境デザイン」を切り口にして、授業研究を通して議論を重ね、研究成果を広く、研究発表会にて公開することができた。今後、今回の研究発表会で得られた反応や新学習指導要領の完全実施を受け、来年度からの研究の計画を模索していく。（文責：牧岡 俊夫）

新教科「探究科」の創設

— 国際バカロレア PYP の理念を取り入れたカリキュラム開発 —

附属大泉小学校

1. 研究テーマ

新教科「探究科」の創設 ～国際バカロレア PYP の理念を取り入れたカリキュラム開発～
(文部科学省 研究開発学校指定 第3年次)

2. 研究内容の概要

(1) 研究開発課題の設定

グローバル化等による変転激しい社会の中で、必要になる知識や技能、概念を新たに形成し自らの可能性を考え未来に向けて行動していくための資質・能力と、どの地域でも、どんな背景を持つ人にも望まれる資質・能力を育成するための新教科を創設し既存教科との相互関連性をもたせた教育課程及び評価方法に関する研究開発。

(2) 研究の概要

これから必要になる知識や技能、概念を新たに形成し、自らの可能性を考え未来に向けて行動していくための資質・能力と、どの地域でも、どんな背景を持つ人にも望まれる資質・能力を育成する新教科「探究科」を創設し、教育課程及び評価方法に関する開発を行う。そのために、以下の3点について取り組む。

①「探究科」の目標と、育成する資質・能力を設定する。

(具体的には、①意味を形成していく力、②自ら学習を進めていく力、③協同性と実践化への態度、④6つの価値観を尊重する態度である。)

②その資質・能力を育成するための教育課程の編成や効果的な指導方法の開発を行う。

(具体的には、社会科、理科、生活科、総合的な学習の時間を「探究科」の時間として割り当てる教育課程の編成と、単元の中で児童に示され、価値観に繋がる議論と解釈の基盤となる命題的な文言である「探究のテーマ」を使った指導方法の開発である。)

③育成している資質・能力を評価するための具体的な方法を開発する。

(具体的には、自己評価活動におけるルーブリックの活用と、自己評価活動を活かした教師による児童の評価方法の開発である。)

3. 研究の経過

第1回研究会	4月4日(木)	本年度の研究計画	
第2回研究会	4月23日(火)	「探究科」資質・能力の再検討	
第3回研究会	5月20日(月)	授業実践(3年部)	講師：東京学芸大学名誉教授 児島 邦宏先生 明治大学教授 佐藤 郡衛先生
第4回研究会	6月6日(木)	授業実践(2年部・4年部)	講師：東京学芸大学名誉教授 児島 邦宏先生 神奈川大学特別招聘教授 安彦 忠彦先生
第5回研究会	6月28日(金)	授業実践(5年部)	講師：開智学園 開智望小学校 野口 真五先生
第6回研究会	7月8日(月)	夏季研究会の概要	
第7回研究会	8月22・23日(木・金)	夏季研究会(授業案検討会)	
第8回研究会	8月30日(金)	PYP単元実践報告	講師：開智学園 開智望小学校 野口 真五先生
第9回研究会	10月25日(金)	授業実践(1年部・2年部)	講師：東京学芸大学名誉教授 児島 邦宏先生 明治大学教授 佐藤 郡衛先生 東京学芸大学教授 川崎 誠司先生
第10回研究会	12月9日(月)	授業実践(5年部・6年部)	講師：東京学芸大学名誉教授 児島 邦宏先生 神奈川大学特別招聘教授 安彦 忠彦先生 日本体育大学教授 角屋 重樹先生
第11回研究会	1月24日(金)	研究発表会の概要確認	
第12回研究会	1月28日(火)	研究発表会最終確認	
研究発表会	2月1日(土)	研究発表会(探究科12実践・各教科11実践)	講師：東京学芸大学名誉教授 児島 邦宏先生 神奈川大学特別招聘教授 安彦 忠彦先生 明治大学教授 佐藤 郡衛先生 東京学芸大学教授 川崎 誠司先生 他
第13回研究会	2月13日(木)	研究発表会の成果と課題	
第14回研究会	3月3日(火)	来年度の研究の方向性	

(文責：上田 真也)

2019年度 研究報告

附属竹早小学校

1. 本年度の研究

本校における本年度の研究内容は以下の2点であった。

- (1) 「学びを深める場をつくる」を研究主題に、竹早地区幼・小・中の連携研究に取り組む。
- (2) 「教育課程特例校」の申請に基づき、幼小連携して「自己実現活動」の研究を進める。

2. 各研究の内容

2. 1. 幼・小・中連携研究

平成29年度から、研究主題「学びを深める場をつくる」のもと、保育・活動・授業において、いかにして学びを深める場をつくるかを研究している。3年次の今年度は、昨年度生成した「学びを深める場をつくる視点」の精緻化と、学びを深める場をつくるための手立てを、各教科・領域の実践に即して検討した。

昨年4月より検討を重ね、昨年11月に公開研究会を行なった。本研究会の活動提案者は下表の通りである。

実践部会分科会	講師	対象学年	授業者
国語	中村和弘 (東京学芸大学)	第2学年	曾根 朋之
社会	大澤克美 (東京学芸大学)	第5学年	宮田 諭志
算数・数学	中村光一 (東京学芸大学)	第6学年	沖野谷英貞
理科	森本信也 (横浜国立大学)	第6学年	窪田 美紀
技術・プログラミング	大谷 忠 (東京学芸大学)	第4学年	佐藤 正範
図工・美術	小林貴史 (東京造形大学)	第4学年	桐山 卓也
体育	松田恵示 (東京学芸大学)	第4学年	久我 隆一
特別の教科 道徳 (人間)	松尾直博 (東京学芸大学)	第1学年	幸阪 創平
養護	朝倉隆司 (東京学芸大学)	-	田岡 朋子

2. 2. 幼小研究会「主体的で協同的な姿勢や態度の育成」の実践及び検証

幼小共同で研究を進めている「自己実現活動」とは、幼児、児童の生活に即した課題、活動、体験を重視しつつ、教科等の枠にとらわれず総合的に学習を進めていく活動である。今年度は、自己実現活動を進めていく際の「教師の関わり」を具体化することを目指した。本研究の授業研究会は下表の通りである。

月 日	学年	授業者	講 師
5月14日	2	曾根 朋之	松尾 直博 (東京学芸大学)
12月6日	6	沖野谷英貞	平野 朝久 (東京学芸大学)
1月29日	1	宮崎佐知子	松尾 直博 (東京学芸大学)
2月4日	4	久我 隆一	佐伯 胖 (田園調布学園大学)

3. 成果と課題

(1) 幼小中連携研究における成果は、大きく以下の3点である。

① 「学びを深める場をつくり、子どもを見とる視点」の再整理による「学びを深める場をつくる視点」を構築した。

② 竹早地区の実践にみられる「手立て」の特徴の一端を確認することができた。また、「目的」と「手段」の視点から「手立て」を捉え直すことができた。

③ 竹早地区の連携カリキュラムに明記されている「教師の関わり」から、幼小中共通の「10の教師の関わり」を生成し、その発達段階に応じた特徴を明らかにした。

(2) 幼小研究における成果は、「自己実現活動」を進めていく際の「教師の関わり」を具体化することで、その活動への理解がますます深まり、どのようにして「自己実現活動」に取り組んでいけばよいか、その具体が明らかになった。その一方で、自己実現活動の定義の見直しや、一昨年度まで設定した5つの観点到代わる指針の必要性も浮き彫りになった。

(文責：徳富 健治)

令和元年度 研究報告

附属世田谷中学校

1. 研究の概要

「世田谷中学校で育てる『21世紀型能力』～各教科が目指す深い学びを通して～」という研究テーマのもと今年度は3年目、まとめの年となる。初年度は、各教科における「深い学び」とはどんなものかについて確認し、各教科から提案し、深い学びについての職員共通の認識を深めていった。各教科の研究と平行し、2020年度から完全実施される特別の教科道徳について、本校としてどのように取り組んでいくかということを検討した。2年目は、本校でこれまで行ってきた生活学習の中で道徳として扱ってきたものを整理し、各学年において、どのような内容について力を入れて道徳の指導をしていく必要があるかを明らかにした。また、教科横断的な取り組みについて検討するために、言語能力、情報活用能力、問題発見力、問題解決力という4つの資質・能力について検討を加えた。ここでの検討を通して、問題解決の過程がおおむねどの教科においても、「問題発見」「計画、情報収集・精査・選択」「解決の実行」「振り返り」の4つの場面があることを共通理解した。さらに各教科の「深い学び」を具体化していくとともに思考のスキルについても検討し、思考スキルをとらえ直し、「思考の手だて」として「分解する」「分類する」「比較する」「合わせて考える」「視点を変えてみる」「置き換える」「推論する」の7つにまとめた。今年度はこの「思考の手だて」が各教科でどのように機能しているかを各教科で検討した。また、道徳の教科化に伴って、生活学習の見直し、再編を行った。本校では生徒の資質・能力を伸ばす学習形態として基本学習、総合学習、生活学習を設定してきた。学習指導要領上では基本学習は「教科の授業」、総合学習は「総合的な学習」の時間、生活学習は学活と道徳に当たる。検討の結果、「特別な教科道徳」は基本学習よりも生活学習に位置づけることとした。生活学習のより具体的な年間指導計画を作成した。

2. 研究の内容と経過

2. 1. 講演会

8月の校内研究会の中で、本学教育心理学講座の佐野秀樹先生を講師にお招きし、不登校やいじめについてご講演をいただき、生徒指導についての理解を深めた。

2. 2. 公開研究会

今年度は6月15日（土）に公開研究会を実施した。全体会を行わず、各教科の研究協議会の中で全体提案を行った。公開授業では、全体テーマのもと、各教科から授業を通してこれから必要となる授業、教育についての提案を行った。

2. 3. 校内授業研究会

校内研究会という位置づけではあるが、ホームページに案内を掲載し、外部の方も参加できるような形で実施した。実施時期と内容については以下の通りである。

11月22日（金）授業者：渡邊 裕 教諭 教科：道徳

テーマ：『『便利』ってなんだろう』～身近なことから考える・図書館資料の活用～

（道徳項目 A5：自分自身 真理の探求・創造）

2月21日（金）授業者：栗田 勉 教諭 教科：美術 テーマ：「レタリング」～漢字のデザイン～

2. 4. 現職教員研修

現職教員研修として、数学、英語は今年度2回実施し、社会、理科は1回実施した。

（文責：研究部長 岡田 仁）

「拡張する学び」の実現

— 真正な学びの視点から —

附属小金井中学校

1. 研究の概要

本校では、平成27年度から平成29年度で「学ぶ意欲を持ち、追究していく生徒の育成」を研究主題として、研究活動に取り組んできた。その中で「深い学び」と「教科の本質」を中心においてきた。平成30年度はこれまでの研究成果を活用しつつ、「深い学び」をより発展させた概念として「拡張する学び」に焦点を当て研究を行った。そして、主題を『「拡張する学び」の実現～深い学びのその先へ～』と設定し研究協議会を行った。

一昨年度までの研究の成果である「深い学び」を振り返ってみると、教科によって様々な特徴が見られたが、共通する部分として探究、発展、創造、拡張といったキーワードを挙げることができる。これらのキーワードについて述べている研究に目を向け、学習における探究や拡張について取り上げられているものとしてユーリア・エンゲストロームの一連の研究に着目した。松下（2010）は拡張的学習と学校学習の間には大きな隔りがあること、そして、探究的学習論は、拡張的学習と学校学習の間に架橋する働きをし、学校学習に制約された教授・学習理論を再構築し、拡張的学習論への接続を可能にするプロセスと方法論をもたらすと指摘している。しかし、探究的学習はそれほどまでに、拡張的学習への橋となり得るのであろうか。

本校ではこの疑問に対して、一歩踏み込んで、探究した後、自ら見出した問題場面において適用し、その知識・理解、技能や見方・考え方を変容・拡張させていこうとすることを期待している。このように、探究した後、自ら見出した問題場面において適用し、その知識・理解、技能や見方・考え方を変容・拡張させていく学びを探究的学習と拡張的学習から区別して本校では、「拡張する学び」と焦点化した研究を行い次の課題を得た。

第一に、「拡張する学び」に焦点を当て、授業を構成していくことの価値が何であるかを明確にすること。第二に、「拡張する学び」を目指す授業の評価方法を作成すること、である。

本校では、この課題に答えるためにフレッド・M・ニューマンの言う「真正の学び／学力」に焦点を当てた。「真正の学び／学力」は次の示唆を与えてくれた。毎回の授業で「拡張する学び」を行うことは可能か、という問いには、「理想として価値づけられた目的としての観念の中に、はっきりと真正の学びを保持していくこと」が重要であることが、「「拡張する学び」に焦点を当て、授業を構成していくことの価値」については、「拡張する学び」を達成する際に「真正の学び」自体も達成することになることを示すことが、「「拡張する学び」を目指す授業の評価方法を作成する」ことについては、ニューマンらの作った基準を日本の授業に沿う形で援用することが、課題へのアプローチとなりうるのではないかと考えた。また、全ての教科、全ての教員で研究にあたる本校の研究方法にとって、共通のビジョンを用いることを可能とする点においても、真正の学びに焦点を当てる価値がある。これらを踏まえて、今年度の研究主題を以下のように定めた。

「拡張する学び」の実現 ～「真正の学び」の視点から～

この研究主題を達成するにあたり、まずは、ニューマンらの示す3つの基準についてのスタンダードを精査することから始めた（参考資料：スタンダード一覧）。その上で、日本の授業に沿う形に改めるために、評価課題と指導法に分かれている「真正の教授法」向けスタンダードを「真正の学びのための授業」向けスタンダードとして、集約、一部変更を行った。

2. 教育研究協議会

11月15日（金）に教育研究協議会を開催し、特別の教科道徳を含めた8教科、10個の授業を公開した。また、鼎談会として本学の渡部竜也先生と南浦涼介先生を招いて鼎談会を行った。（文責：柴田 翔）

令和元年度 研究報告

附属竹早中学校

1. 今年度の研究

1. 1 連携研究の内容

竹早地区連携研究として主題「学びを深める場をつくる～「手立て」に焦点を当てて～」に取り組み、11月16日（土）に幼小中合同公開研究会を実施した。今年度は、上記を主題とした第7期研究の3年目にあたり、昨年度提案した「学びを深めるために必要な汎用的な力」の再整理と学びを深める手立ての整理、これまでの研究成果である主体性の変容を整理した「ステージステップ」に示された「教師の関わり」の整理を中心に行った。公開研究会ではその成果と授業実践を発表するとともに、新たな試みとしてシンポジウムも行った。コーディネーターに金沢学院大学教授の多田孝志先生、シンポジストに東京学芸大学の福元真由美先生、中村和弘先生、荒井正剛先生の3名を迎え、テーマ「幼小中連携からみた「学びを深める場」とは」について各校種の立場から提案をいただき、議論を行うことができた。

一方、本校独自の研究として、昨年度から取り組んできた大学と連携自治体との連携によるCCSSプロジェクト研究や「多様性の教育」の研究についても精力的に進め、深めることができた。また、「多様性の教育」については、2月14日（金）に公開研修会を開催し、研究の成果と授業実践を発表した。

1. 2. CCSS 事業の内容

(1) 校内支援体制の開発

本校独自の研究として、昨年度から取り組んできた大学と連携自治体との連携によるCCSSプロジェクト研究や「多様性の教育」の研究についても精力的に進めることができた。昨年度から引き続き、本事業で入学した生徒にどのような支援が必要かを検討するために、生徒本人の学校生活や家庭での様子等に関するデータの収集に取り組んだ。また、新たな支援体制としてスクールソーシャルワーカーを置き、それを含めた支援体制をつくることができた。

(2) 「多様性の教育」の研究

昨年度構築した「多様性の教育」の枠組み「多様性を理解する」「多様性を活かす」について、実践をもとに検討し、その内容を深めることができた。また、「多様性の教育」のめざす生徒像を、特にこれからの社会に対応した生徒の育成という未来志向の視点を取り入れて検討し、それを通して研究の目標や方向性を全教員で共有することができた。

2. 公開授業

以下の表は、幼小中連携研究の一環として行われた授業研究会と中学校独自に行った公開授業の一覧である。

日時	教科	授業者	講師	教科	授業者	講師
6月14日他	国語	荻野 聡	中村 和弘（東京学芸大学）	音楽	中野 未穂	猶原 和子（江戸川大学）
	数学	小野田啓子	中村 光一（東京学芸大学）	美術	杉坂 洋嗣	小林 貴史（東京造形大学）
	理科	八坂 弘	森本 信也（横浜国立大学名誉教授）	技術	浦山 浩史	松本 誠之（教育園芸研究家）
	道徳	菊地 圭子	松尾 直博（東京学芸大学）	家庭	酒井やよい	大竹美登利（東京学芸大学名誉教授）
	英語	松津 英恵	高山 芳樹（東京学芸大学）	養護	塚越 潤	朝倉 隆司（東京学芸大学）
10月25日他	社会	上園 悦史	大澤 克美（東京学芸大学）	英語	松津 英恵	高山 芳樹（東京学芸大学）
	数学	佐々木陽平	中村 光一（東京学芸大学）	音楽	中野 未穂	猶原 和子（江戸川大学）
	理科	金子 真也	鈴木 一成（東洋大学）	美術	杉坂 洋嗣	小林 貴史（東京造形大学）
	道徳	菊地 圭子	松尾 直博（東京学芸大学）	家庭	酒井やよい	大竹美登利（東京学芸大学名誉教授）
	養護	塚越 潤	朝倉 隆司（東京学芸大学）			
2月15日	道徳	菊地 圭子	多田 孝志（金沢学院大学）	社会	齋藤 貴博	多田 孝志（金沢学院大学）

3. 本年度の成果

連携研究、本校独自の研究いずれも、実践を基に具体的に即して議論することにより、内容を深めることができた。「実践から理論をつくる」という方針の重要性を改めて認識することができた。（文責：小岩 大）

令和元年度 研究報告

附属高等学校

1. 研究の方向性～研究体制の整備～

本校の研究部は、研究推進委員会・SULE委員会・教育工学委員会の3つが連携して研究を推進する体制をとっている。「研究推進」は公開教育研究大会の運営を中心に、教科を越えて学校全体で取り組んでいく研究の方向性をつくる。「SULE」は主にSSH事業の推進や探究活動の企画・運営を、「教育工学」はBYOD (Bring Your Own Device) や1to1 (1人1台PC) 導入のように、ICTの観点からの授業改善を提案するのが役目である。本校における研究の方向性は、「資質・能力の育成」という観点のもと、カリキュラム・マネジメントを実践し、実践事例を蓄積・発信していくことである。

2. SSH (スーパー・サイエンス・ハイスクール)・指定事業関連研究

SSH (スーパー・サイエンス・ハイスクール) の事業は2期3年目の活動であり文部科学省からの中間評価を受けた。高度科学・技術社会を生きるためのキー・コンピテンシーの育成・評価、探究活動の整備、理数融合科目の開発、タイ国チュラポーン高校 (PCSHSCR) との交流事業、NICE への参加、高大接続事業、さまざまな理数系のイベントなど多くの事業を実施した。

3. 第18回公開教育研究大会

令和元年11月23日 (土) 会場：東京学芸大学附属高等学校 参加者数：約340名

研究主題：教科等横断的な視点からの教育活動の改善～「学習評価」を軸としたカリキュラム・マネジメント～
講演会テーマ：新高等学校学習指導要領実施を見すえたカリキュラム・マネジメントのあり方とその評価

講師 根津朋実 筑波大学人間系教育学域 教授

4. 授業実践研究会

教育研究の成果の公開のために、全体テーマを掲げて開催する「公開教育研究会」とは別に、教科・個人が主体となり実施する「授業実践研究会」を実施している。昨年度の2回に続き、今年度は下記の通り5回実施した。

第3回授業実践研究会「探究活動」

令和元年7月13日 (土)

内容：探究講座 (1年次) 授業公開、本校の探究授業の紹介、探究授業についての意見交換会

講師：岡本尚也 一般社団法人 Glocal Academy 代表理事

第4回授業実践研究会「探究活動」

令和元年9月28日 (土)

内容：探究講座 (1年次) 授業公開、本校の探究授業の紹介、探究活動のテーマ設定についての意見交換会

講師：川村教一 兵庫県立大学大学院教授

第5回授業実践研究会「地理」

令和元年11月19日 (火)

内容：地理A (1年) 授業公開、新学習指導要領実施に向けての意見交換会

提案者：松本至巨 本校地歴公民科

第6回授業実践研究会「英語」×第20回教員 ITC 令和元年12月8日 (日)

内容：Intensive Training Course, 協議会

第7回授業実践研究会「公民」

令和2年2月27日 (木)

内容：現代社会 (2年) 授業公開、新学習指導要領実施に向けての意見交換会

提案者：楊田龍明 本校地歴公民科

5. その他

現職教員研修講座、全国附属学校研究大会での発表、各種国際交流等、さまざまな方面での研究活動を実施した (詳細は『東京学芸大学附属高等学校研究紀要57』参照)。なお、昨年度より本校に研究会などで来校した外部の方への追跡調査を実施し、本校の取り組みがどれほど外部の実践に寄与できているのか調査している。

(文責：若宮 知佐)

令和元年度 研究報告

附属国際中等教育学校

「国際社会で活躍する人材育成」を目的に設立された本校では、国際バカロレア（以下、IB）の教育システムに基づく教育実践をしている。本年度は、校内研究のテーマを「国際バカロレアの趣旨に基づくカリキュラム・マネジメント」とし、研究グループ制度を発足させ、教育研究を行っている。また、スーパーグローバルスクールの指定は最終年度を迎え、スーパーサイエンスハイスクールとしては2期目の指定を受け、新たな取り組みを重ねている。

1. 令和元年度 授業研究会の実施について

2019年11月22日（金）に、授業研究会を開催した。授業研究会は、隔年で開催する公開研究会の間に開催し、本校の教育実践研究の過程を示すことで、その方向性や課題を参加者の皆様と共有および協議し、今後の改善に役立てていくことを目的とするものである。IBプログラムの導入により、すべての教科科目で共通の単元設計のイメージを持つことが、カリキュラム・マネジメントの土台となっている。その中で、今年度は「研究グループによる授業研究」を試行的に実施し、授業研究会を実施した。新学習指導要領の方向性とIBプログラムとの親和性を整理し、研究グループおよび教科によるカリキュラム・マネジメントの視点を模索している。さらに、本校で課題となっている「学習の転移」および「資質・能力の共通性と固有性」について、研究協議を行った。

2. スーパーサイエンスハイスクール事業2期目1年目の動向について

SSH 事業は、2019年度に2期目の指定を受け、実践型研究開発として新たなスタートを切った。1期目の5年間の研究開発の試みを、実践・検証し、より確かなものにしていくための研究開発となる。

<研究開発課題名> 「学びの本質」を捉え、SOCIAL CHANGE をもたらす科学技術人材の育成

【仮説1】 実社会の状況を取り込んだ探究的な学びを実現する授業設計は、グローバルな視野と柔軟な科学的思考力の育成に有効である。

【仮説2】 生徒課題研究および理数探究活動は、課題発見力、情報収集力、分析・評価力、自律的活動力、コミュニケーション力等の研究スキルの育成に資する。

【仮説3】 仮説1・2における中高6年間の授業と課題研究のスパイラルは、生徒にSOCIAL CHANGE の視点をもたらす。

3. スーパーグローバルハイスクール事業5年目の動向について

2015（平成27）年度に指定を受けたSGH 事業は今年度5年目を迎えた。これまでの成果と課題を踏まえて、以下のように事業を進めた。

<研究開発構想名> 「多文化共生社会を支える組織力・対話力・実行力の育成」

【仮説1】 課題研究の主軸の概念化と課題意識の焦点化

— 「国際教養」の整備と体系的プログラム構築による課題研究の質の高度化

【仮説2】 課題研究とその評価に際しての外部機関との連携強化

【仮説3】 グローバル・コンピテンシーの評価規準・評価方法の策定

（文責：鮫島 朋美）

主体的・協働的な学びを育む支援

附属特別支援学校

平成29年4月、特別支援学校幼稚部教育要領及び特別支援学校小学部・中学部学習指導要領（以下、新学習指導要領）が公示された。今回の改訂では、1) 育成を目指す資質・能力を明確にするため、3つの柱（「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」）で各教科等の目標や内容を構造的に整理し充実を図ったこと、2) 主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善を図っていくこと、3) 各学校におけるカリキュラム・マネジメントを推進していくこと、が主に規定された。

本校では、平成27年度より『主体的・協働的な学びを育む支援』という主題のもと、これまで4年間「主体的・協働的な学び」の視点からの授業改善を中心とした研究を進めてきた（図1）。4年間の研究の成果は、幼稚部から高等部までの全ての学部において、1) 「主体的・協働的な学び」を通して目指すべき子供の姿を明らかにできたこと、2) 「主体的・協働的な学び」を育む授業のポイントを作成できたこと、の2点である。そこで、5年次となる今年度は、これらの研究成果をいかに日常レベルに落とし込むかという観点から、授業実践研究を行った。

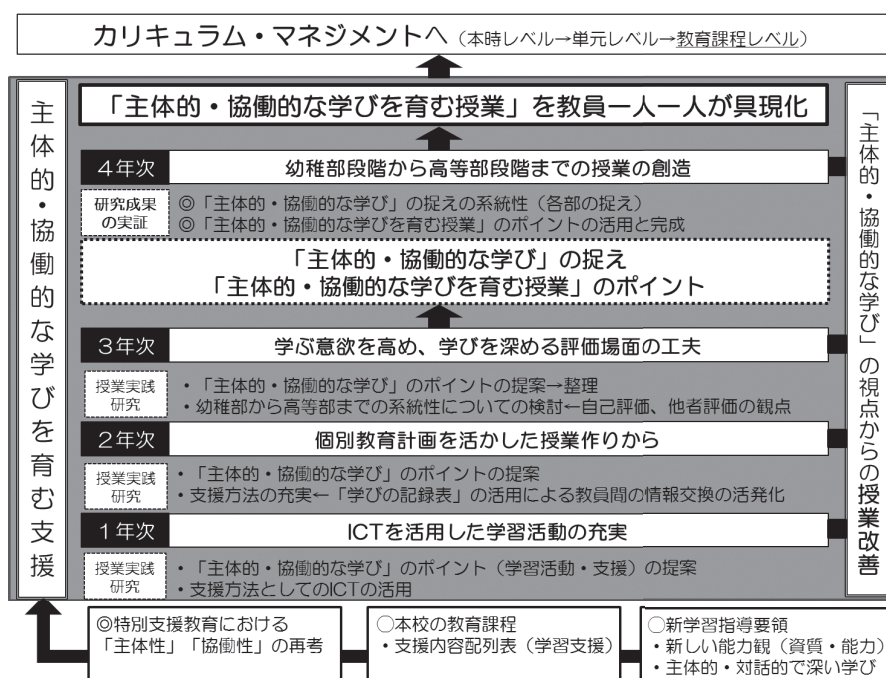


図1 「主体的・協働的な学びを育む支援」4年間の研究経過

今後は、各部間の段階性の更なる検討を行うとともに、学部内に加えて各学部“間”においてもそれぞれの教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた横断的な視点で、その目標の達成に必要な内容を組織的に配列していくなど、より一層のカリキュラム・マネジメントに取り組んでいくことが必要であろう。

現代の子供たちが生きる社会は、グローバル化の進展や人工知能（AI）の飛躍的な進化などにより将来の予測が非常に難しい社会である。そのような社会を子供たちが生きていくには、学校教育段階でどのような力を身に付けていけば良いのだろうか。我々教員は、常に目の前の子供たちのこれまでとこれからを見ながら、創造性豊かに教育活動を行っていく必要があるのではないだろうか。

（文責：齋藤 大地）

2019年度 研究報告

附属幼稚園（小金井園舎）

1. 研究の概要

今年度は「しなやかな心と体をはぐくむ保育（2年次）」を研究テーマとして、昨年度の研究成果と課題を踏まえ、幼児のしなやかな体の動きや心の働き、それを支える環境構成及び教師の援助について事例検討を継続している。また、全園児を対象にした運動の量的調査に取り組んでいる。これは本園の環境や保育内容を通して幼児が経験している動きの種類や頻度を明らかにすることを目的としている。

特別支援教育に関する研究にも取り組んできた。校内委員会では本学の大学教員と連携しながら、特別な配慮を要する幼児への指導について話し合っている。また、保護者に対しても発達等の悩みを抱える保護者同士が交流する場を設け、多方面から支援が受けられる体制作りを目指している。

2. 園内研究会の方法・内容

2. 1. 幼児のしなやかな心と体を育む保育のあり方について学びを深めるため、定例の研究会、保育検討会を設け第三者からの意見を得ながら具体的な環境の構成や教師の援助について検討を行った。
 - ・週2回の園内研究の実施：事例の分析、検討、研究内容の構造化
 - ・保育検討会（5月24日、6月7日、6月14日、10月21日、11月1日）
2. 2. 現職教員（幼稚園教諭、保育士、小学校教諭）、学生、大学教員を対象にした研究協議会を開催した。
 - ・11月9日（約120名参加）
 - ・指導：赤石元子先生（元東京学芸大学附属幼稚園副園長）田代幸代先生（共立女子大学）
河邊貴子先生（聖心女子大学）岩立京子先生（本学教授）

3. 特別支援教育に関する研究の方法・内容

3. 1. 校内委員会を設け、専門の大学教員と本園教員が協議した。
 - ・年3回（5月16日、9月24日、1月16日）
 - ・校内委員会の実施：対象児観察、個別の指導計画をもとにした話し合い。
 - ・講師：大伴潔先生、林安紀子先生（本学教育実践研究支援センター）
3. 2. 特別な配慮を要する幼児をもつ保護者の会を実施した。
 - ・レモンの会（11月30日）：在園児保護者と卒園児保護者、本園教諭、大学教員らとの情報交換や相談の場

4. 成果等

- ・昨年度の成果と課題を踏まえてエピソードの検討を行い、幼児のしなやかな心と体について、また環境の構成と教師の援助について考察を深めた。さらに運動の量的調査を行なうため、動きのチェック表を作成、学年ごとに調査を実施した。3年次も同テーマで研究を継続するため、中間報告としてこれまでの研究成果をリーフレットの様式でまとめ、発信できるようにした。
- ・校内委員会を通して、特別な配慮を要する幼児の理解を深め、指導に活かした。また、保護者の会を開き、子育て支援及び特別支援教育の理解、支援体制作りの推進を図った。今後も大学教員と連携しながら推進していく。
(文責：町田 理恵)

2019（令和元）年度 研究報告

附属幼稚園（竹早園舎）

1. 今年度の研究

竹早地区3校園、幼小中の連携研究では、一昨年度から主題「学びを深める場をつくる～手立てに焦点をあてて～」に取り組んでいる。昨年度明らかにした「自ら学びを深めるために必要な力」を育むことを目指し、今年度は学びを深める場をつくるための「手立て」を追究し、実践において、いかにして学びを深める場をつくるかを研究した。

附属学校研究会では、幼児教育分野の先生方や附属幼稚園小金井園舎の教員と『保育現場における実習指導のあり方—附属縁における指導計画指導の観点から②』をテーマに、3年次基礎実習の指導のあり方について、指導計画作成に視点をあて意見を出し合いまとめた。

2. 連携研究の内容

（竹早地区幼小中連携の研究の詳細については、竹早小・中のページも参照）

2.1. 実践研究部会〔幼稚園分科会〕での取り組み

今年度も振り返りシートを活用し、幼児が「学びを深めている姿」に着目し記録をとった。手立ての分析には、幼小中研の「10の手立て」の項目を活用している。

2.2. 実践研究

幼稚園・家庭科の実践	1学期	4歳児学年，5歳時学年	各2回	中学3年生との交流
	2学期	4歳児学年2回	5歳児学年1回	同上
	3学期	5歳児学年1回	同上	

幼小中公開研究会 11 / 16（土） 幼稚園・家庭科分科会

家庭科教育分野准教授 藤田智子先生，幼児教育分野准教授 福元真由美先生両先生による指導助言を受けた。公開保育・授業を80名程が参観し，45名程が協議会に参加した。協議会では，異校種，教科の教員が混ざってグループディスカッションを行い，実践で見とった学びを深める子どもの姿や手立てについて意見交換を行った。

3. 幼小校内研究会

幼小の枠組みで行われる活動研は，研究部からの提案のもの，学年部会からの提案のものがある。今年度は年間5回，活動・授業の実践研究を行い，教員が提案した活動について協議を行った。今年度は年度当初に「自己実現活動」の定義が再提案され，幼児教育とのつながりも確認された。

4. 校内委員会

週1～2回特別支援員及び教育相談の先生が来園し，配慮を要する幼児の様子を見たり，担任と指導の方法について協議したりした。年度当初と年度末に，園内の教員と子どもの実態と支援の方法について協議する機会を設け，共通理解すると共に，次年度への支援の連続性を図った。

5. 成果と課題

実践事例の分析を試みる中で，幼児教育特有の手立てがあることが明らかになった。今後は検証を重ね，それらを幼小中連携研究に位置付けていくと共に，教育課程の改定を目指す。（文責：神山 雅美）